

第199号

平成18年4月

E-mail: © 2006

shimz@mb.infoweb.ne.jp

SCだより

編集 発行 人

清水 吉男

(株)システムクリエイツ

横浜市緑区中山町 869-9

TEL/FAX 045-933-0379



64回め



MENU

- 特製ブレンド 380
- レモンティー 350
- 日替りケーキ 300
- ぶるせす 無料

アルコールは置いていません

1週間単位のスケジュールの危険性についての話が一段落したところで、カウンターの奥で聞いていた客が話しの中に入ってきた。

「あのぉ、ちょっとよろしいですか?」

『はい、何でしょうか?』

「私も、ソフトウェア開発部門の責任者のような役をやっている者ですが、先程から、1週間単位のスケジュールの危険性についてのお話を、失礼とは思いつつ横で聞かせてもらいました。弊社でも同じような問題が起きていて、やはり1週間単位にしてはどうか、という意見が出ています。私自身はそのことに釈然としなないものを感じていたのですが、書かないよりもましなのかという考えに傾いていたところです。この件は、先ほどの皆さんのお話を聞いて参すっきりしました。参考にさせていただきます」

『どうぞ、構いませんよ』

「ありがとうございます。ところでスケジュールに絡んで一つ伺いたいのですが」

『いいですよ』

「実は、プロジェクトのスケジュールが立てられない原因を調べていく中で、サイズ見積もりができていないことが分かりました。そしてさらに辿っていくと、要求仕様の項目数が分からないから、という答えが返ってきました」

『スケジュールは何時立ててきましたか?』

「要求仕様書がある程度書かれたところで、以降の作業のスケジュールを立てています」

『仕様の状態になっていない段階で見積もりを急いだのですか?』

「そうです。見積もりを早く出さなければいけないと言うこともあって、要求仕様書の内容が中途半端な状態で見積もっていると思います」

『当然、その状態の要求仕様書では、この先の見積もりの根拠にはならないでしょう』

「そうだと思います。それで最近提案されたのが、要求仕様書を作成する作業とそれ以降の作業を分けて計画してはどうかというものです。要求仕様書がちゃんとできたところで、以降のプロセスを見積もれば良いのではないかとありますが、これで良いのでしょうか?」

『お客さんはどう思いますか?』

「いちど、要求仕様書で見直しますので、以前のようにはならないのかな、と思うのですが、それでも何かスッキリしないのです」

『なるほどね。要求仕様書を作成するミニプロジェクトのスケジュールが成果物の出来上がり状態をイメージして、そこでイメージされたサイズ見積もりに基づいてきちんとたてるのであれば問題ありません。ところで、このミニプロジェクトの納期が先に決まっていますか?』

「はい、一つのプロジェクトでは、いちおう2ヶ月という期限が設定されています」

『つまり、要求仕様書を作成する作業を全体から切り離して、これだけを2ヶ月で仕上げ、そこで確定した要求仕様書の項目数から設計以降の作業を改めて計画するということですね』

「そうです」

『もう一つ伺いますが、最終的な完成の期限は事前に設定されているではありませんか?』

「はい、この製品は10月末にテストを完了して、12月の中頃には市場に出すということになっています」

『組み込み製品の場合は、完成時期の方は非常に高い優先度で決まっていますよね。要求仕様書の作成を主プロジェクトから切り離したとしても、この作業を2ヶ月と期限を切った時点で、サイズ見積もりが省かれていませんか?』

「それは、2ヶ月という期限が、今回の要求ではどれだけの仕様の項目数が抽出されるかというサイズ見積もりから仕様化作業に必要な工数を算出したものかどうかということですね」

『そうです。そのようなステップで2ヶ月という期限を割り出したのであれば良いのですが』

「そういわれてみれば、そのようなサイズ見積もりは行われた形跡はありません」

『なるほど、プロジェクトの期限が10ヶ月から2ヶ月に縮まり、そこでの作業が要求仕様の作成に単純化されたことで、妙な安心感のようなものを感じているではありませんか?』

「それって、10ヶ月のスケジュールは立てられないが、1週間のスケジュールなら書けるといふのと似ているように思うのですが」

『そうです。まったく同じ錯覚です。2ヶ月に期限が短くなったことで没頭しやすくなっているのでしょう。本質は何も変わっていないのですが、だいいち、少し前まで要求仕様の完成状態をイメージせず、サイズ見積もりもできなかった人とたちが、要求仕様書を作成する作業だけを切り離しただけで何がかわるのですか?』

「結局、今までと同じように、2ヶ月で“仕上げる”でしょうが、このあとスムーズに設計作業に入れるレベルになっていない可能性があるということですね」

『サイズを見積もることの意味をよく理解されていないのですからね。サイズなんて見積もって何の意味があるのかと思っているのではないですか?サイズ見積もりを省いたということですか?』

「何ができてくるかやってみなければ分からないということです」

『この場合の“仕上りの状態”というのは、要求仕様書とその状態に書いていければ、この後の設計作業に入れるという状態のことですね』

『そうです。結局、後半の主プロジェクトに入ったところで、今までと同じように仕様の不足を補うために設計仕様を書きかねません。だって、少し前まで、そのような方法で作業を進めてきた人たちですからね。そのようなやり方が身に染み付いているはずですよ。PFDのようなツールを使ってシミュレーションを繰り返して身に染み付いたプロセスを洗い流しているのなら話は別ですが、そうでない限り、簡単には実現しませんよ』

「要求仕様書を作成する作業だけを切り離しても、サイズ見積もりを省

いている限り、そして最終の完成時期が決まっている状態では、従来と全く同じことが起きるということですね」

『そうです。このことに早く気付いて対応しないと、対応方法を見失う危険があります』

「“見失う”とはどういうことでしょうか?』

『うまくいかないことで、この問題を解決する方法は存在しないと考える危険です』

「いったい、どうすれば良いのでしょうか?」

『仮説の段階(仕様化に取り掛かる前の段階)で要求仕様書のサイズ見積もりが必要ですよ』

「イメージを助けるために、要求仕様の完成状態を少し書いてみるのも良いでしょうか?』

『慣れないうちはその方が良いでしょう。最初に要求仕様書の構成を決めて、そこで機能などのカテゴリに分けて、その中で要求の項目数を見積もり、さらにその要求の下に抽出される仕様の項目数を見積もることです』

「その項目数から、作業の生産性を考慮して要求仕様書を作成する工数を算出するのですか?』

『そうです。その工数に対して何人で取りかかるかで期限を決める方法と、2ヶ月で仕上げるために必要なリソースを最初から投入する方法があります』

「最近読んだ“USDM”の表記法を使って、最初に上位要求を押さえておけば、仕様化の作業を分担しても混乱しないかも知れませんね」

『それが良いでしょう。問題はここからです。こうしてイメージした“仕上りの状態”に近い要求仕様書が書かれたら、ここから設計作業以降のプロセスを具体的にイメージして、以降のサイズ見積もりも省かないことです』

「その結果、最終納期に間に合わないかも知れないということになりませんか?』

『この段階で最終納期の見通しがつくことが重要です。もし、算出された工数に対して、当初に想定しているリソースでは期限が間に合わないとなれば、リソースの投入を増やすか、機能をトレードオフすれば良いのです』

「でも、このとき上の方から“人は増やせない”といわれることがほとんどです」

『さらに工夫を引き出すためにそのような圧力をかけることはありますが、限度を超えた圧力は逆効果だということに気付くべきですね。』

「“姉齒事件”から学習すべきです。ところで、“人は増やせない”といわれて簡単に引き下がるということは、確信がない状態で増員を要求したということですか?』

「組織の責任者は、見積もりの資料が適切なものであれば、リソースの増員がトレードオフの交渉を支援すべきということですね」

『その対応が必要なのですか?その責任者も、サイズに基づく精度の高い見積もりをやったことがないと、目の前に出された見積もり資料の欠陥を見抜けないかも知れませんね』

「私自身が、ある意味でその判断をする立場になることもありますが、正直なところ、見積もり資料の欠陥を見抜く自信がありません」

『その状況でしたら、お客さん自身が実際のプロジェクトの中で取り組んで学習するか、“センターSQA”のような信頼できる人がいれば、その人の意見を求めてみることです。もちろん、両方を使うこともできます』

見積もれないからといって、要求仕様書を作成する作業だけを分離しても、仮説段階でサイズ見積もりを省いたのでは何の効果も得られない。

か ね 曉 鐘 の 音 182

爺の老婆心

先月、初めての孫が生まれた。下の子供も昨年就職したことで、「子育ての責任」は終わったと思っていたが、生まれてきた孫の顔を見てみると、「親」とは違った立場でこの孫が育っていくことを支援する責任が生じたことを感じている。「こういう役が残っていたのか」と。

私の二人の子供が生まれた時は一九八〇年前後で、その時、二〇年後の社会すなわち二一世紀初頭の社会を予想した。当時の日本経済は飛ぶ取を落とす勢いがあった。ある程度はこの勢いは持つたろうと思つたし、少子化や高齢化の影響も凡そ読めていた。九〇年のバブル崩壊の時には少し軌道修正が必要だったが、だいたいは予想の範囲内であった。一方、社会の方は「核家族」の延長線で「個」の行き過ぎから連帯感を失い、家から出れば危険が一杯で殺伐とした社会に向かうように感じられたので、それに対応できるように子供達には教えたつもりである。

子供達が二人とも親の手を離れたことで、あとは自分達夫婦の老後の計画や、私自身の「老計」と「死計」を考える番と思つてきた。六〇

歳までに私の持っている技術を活用して残すというのも「老計」の一環である。だが、孫が生まれたことでそれだけでは済まなくなつたようだ。いや、そのことも私自身の「老計」に含まれているのかもしれないと思ひ直して二年前とは違つた立場で、孫の二〇年後の社会を考えて見ることにした。

一九九九年から続いている「ゼロ金利政策」と、「ペイオフ解禁」の長刀（なぎなた）によって、預貯金の口座から切り出された資金が「リスク」の世界に流れ出し、これを狙つていた人たちの手に渡つて彼等の多くを「勝ち組」に仕立て上げた。資本金の貯蓄を低くして企業化を容易にし、株式市場の条件も信じられないくらいに緩められた。ネット証券の設立条件を緩和することで、株式市場に資金が集まりやすくなった。その結果、シナリオ通りに預貯金の口座から溢れた資金を吸い集めることに成功した。そして、勝ち組と負け組もこの過程で形成されていった。いわゆる時流に乗つた人たちが生まれたのである。

この過程で、企業の存在意義が「社会への貢献」というところから遊離し、単に利益を上げるための組織に変質した。一旦、このように変質した企業の概念は簡単には戻らないだろう。

その結果、企業活動の「禁じ手」の蓋はほとんど外れてしまつた状態にあり、犯罪まがいの企業活動も増えるだろうし、その組織の中で多くの人は壊れていくだろう。

一方、一〇年後の日本経済の状態は、新興国に激しく追い上げられているはずである。今のように教育に必要な資金が回されず、コンクリートとアスファルトに消えていく状態が続くのであれば、経済的には相当な位置に転落していることも予想される。選挙の「票」を振りかざして政治家をあやつり、自分達の快樂を手にし続ける為に大事な税金を横取りする仕組みが続けば、この国は間違いなく破綻する。

これから教育を受ける子供や青少年には選挙の「票」は与えられない。つまり、彼等は自分達の将来を「声」にして政治に反映する手段は与えられていないのである。だから、大人が代弁して行動する必要がある。その大人が、自分達の懐を増やすことに血道を上げて大事な税金をコンクリートで固めることに使つたのでは、国の将来はない。教育に投入した資金は何倍にもなつて返つてくるが、コンクリートで固めてしまえばそれまでである。新興国であれば、橋や道路は経済を活性化する役目を果たすが、すでに日本ではそれは達成されていて、これ以上は投資の効果が上がる状態ではない。

いずれにしろ、今のままでは間違いなく日本の経済的地位は低下する。教育のレベルが下がつてしまえば、世界からの投資を呼び込むことが

は難しくなり、仕事に就ける機会も減少する危険がある。そうなると、今以上に負け組が増えてしまい、社会は一層不安定になる。「遊ぶ金が欲しいから」という身勝手な欲望のために、人の権利は簡単に侵害されるだろう。

すでに預金ゼロの世帯が全世帯の二五%に達しているという。日本の二二〇〇万を越える世帯の預金が底を突いたのである。高齢者の世帯が多いと思われるが、富の再配分の仕組みが見直されない状態では、いったん預金ゼロの状態に陥つてしまつた人には、厳しい社会になることが予想される。

若い人の場合はなおさら深刻な問題になる。仕事に就けないことで人は壊

れていく。仕事に就けた人も、新興国に追い上げられ、コストの削減や納期の短縮が今以上に求められる可能性が高いが、初等教育の過程から、工夫することや考えること、継続して学習する習慣などを身に付けていない状態では、時代の要求に応えられずに疲弊して壊れる危険もある。そのような工夫は今の学校教育の場では身に付かないだろうから家庭でカバーするしかない。ここに爺の出番があるのかも知れない。

困つたことに今の社会の仕組みのままで、私にはこれとは逆の状態がイメージできない。もっとも、二〇年後に私自身が生きていたとは限らず、まuffledの「老婆心」なのだ。

今月の一言

「自由とは自己の行為が自己の人格に其の原因を有し、何等他に律せらるることなき状態を謂う」
(安岡正篤「日本精神の研究」より)

今日の日本社会の混乱の原因の一つが「自由」を履き違えたことにある。「自由」を正しく教えてこなかったことが取り返しのつかない社会にした。

自由とは、簡単に言えば、自己の意志に反して誰からも指示されないことをいう。政治的・経済的・宗教的に拘束されない状態でもあり、行動自身も自己の人格に基づくものでなければならぬ。もちろん、自己の意志に従つた行動によって、他人の自由を束縛することは許されない。それは基本的に「犯罪」として規制されている。

当然、他から金を借りた時点で自由は制限されることになる。多重債務者が、簡単に騙されるのは、すでに自由を失つていて自律的な行動ができないからである。「小泉チルドレン」と

呼ばれる人たちにも自由はないし、いわゆる政治家と呼ばれる人たちの多くは、政治家になつた時点で自由を失っているのかもしれない。

さらに、安岡氏はこの本の中で「独立なくば国家に自由はない」という。独立国というのは、「国家が自己の意志に反して他の何者にも律せられぬ存在たることを意味している」のである。その視点に立つて見渡したとき、何故、米軍のグアム島への移転費用を日本国が負担しなければならぬのかという疑問が湧く。さらに、一九九三年から毎年、米国から出される「年次要望書」によって、日本の国政への介入を受け入れている。建築基準法の変更や郵政民営化もここで要求された項目である。どうやら日本は独立国ではなかったのか。